

〈論 文〉

カント倫理学へのヒュームの衝撃(2)

—— 自由の原因性をめぐって

高 田 純

〈目 次〉

はじめに

第1章 近代の自由意志論争

- 1 ホッブズの意志論
- 2 ロックの自由意志批判
- 3 スピノザによる自由意志の否定
- 4 ライブニッツの自由意志論 (前 号)

第2章 ヒュームの意志論

- 1 因果性の認識論的, 実践論的基礎づけ
- 2 行為の因果性と自由
- 3 柔らかい決定説と意志の自由
- 4 行為の因果性の規範的特性 (本 号)

第3章 批判期以前の意志論

第4章 自由の原因性の意味 (次号予定)

第2章 ヒュームの意志論

1 因果性の認識論的, 実践論的基礎づけ

(1) カント哲学と『人間知性の研究』

ヒュームからの衝撃がカントの『純粹理性批判』の執筆の1つの大きな機縁となったことはよく知られている。カントがヒュームの見解に直接に接したのは『人間知性の研究 Enquiries concerning Human Understanding』の独訳『人間の認識の哲学的試論 Philosophische Versuche über die menschliche Erkenntnis』(1755年)によってであると想定される。ヒュームは最初1748年に『人間知性の哲学的試論 Philosophical Essays concerning Human Understanding』という表題で匿名で出版し, 1751年にそれを改定増補して, 実名で出版し, 1758年にこれを『人間知性の研究』(以下『人間知性研究』と呼ぶ)という表題に変更した。1751年の版が1755年に『人間の認識の試論』という表題で独訳されたわけである。この著作は, 1739-40年に出版された大著『人間本性論 A Treatise of Human Nature』を縮小した普及版という性格をもつ。後者の著作は評判がかんばし

くなかったため、ヒュームはこれを一般向けに書き直して、前者の著作とした。後者はドイツではようやく 1790 年から 92 年にかけて、しかも抄訳として紹介された。『純粹理性批判』初版の公刊は 1781 年であり、この時点では『人間本性論』は独訳されていなかった。カントがこの著作を英語の原文で読んだ可能性は認められていない（『人間知性研究』についても同様）。

ヒュームは因果性を、人間が習慣をつうじて想定するものにすぎないとみなした。因果性を自然そのもののなかに客観的に実在し、あるいは理性によってアプリアリに把握されるとみなすことは独断論であると彼は批判する。このような批判がカントに衝撃をもたらした。ところで、ヒュームは自然における因果性をこのような意味で相対的なものとみなしながらも、自然における出来事が因果性に従っていることを疑ってはいない。彼はさらにこの因果性の観念を人間の行為にも拡張し、行為も自然における出来事と同様に、因果性に従うとみなす。

カントは意志の自由を擁護するために、自然の原因性（因果性）から区別して「自由の原因性」を主張するが、これはヒュームによる行為の決定論的理解に対する対抗という意味をももつのではないかというのが、本稿の基本的な問題意識である。以下では、『人間知性の研究』を中心に、行為の因果性についてのヒュームの見解を検討する。

なお、訳語についてであるが、ヒュームは〈causality〉という術語を用いていない。『人間本性論』においては〈causation〉という術語が用いられる（THN.I.iii.2/p.73/(一) 127 頁）¹⁾。これは「因果性」とも訳されるが、本来は「原因となること（原因作用）」という意味をもつ。『人間知性研究』においては〈causation〉という術語はあまり登場しない。ヒュームにあつては「原因と結果の関係」という表現が基本的であるが、本稿では簡略化して「因果性」という表現することにする。カントのばあいも、〈Kausalität, Ursachlichkeit〉は、「原因 causa, Ursache であること」という原義に立ち返って、「原因性」という意味を与えられている。カントも「原因と結果の関係」という表現を基本にしているが、これを「因果関係 Kausalverhältnis」ともいい換えることもある。

(2) 習慣の産物としての因果性

ヒュームは科学を、「観念のあいだの関係」を扱う数学（論理学をこれに含めてよいであろう）と、「事実の実質 matters of fact」を扱うその他の科学とに大別する（EHU.20/p.23/22 頁）。前者の科学は観念のあいだの形式的関係を知性 understanding（理性 reason）によってアプリアリにとらえるのであり、その認識（『人間本性論』においては「確実知 knowledge」と呼ばれる）は厳密に確実である。これに対して、後者の科学の認識は厳密には確実ではなく、「蓋然知（蓋然性）probability」である（EHU.IV.30/p.35/32 頁。cf. THN.I.iii.1,2/p.69ff./p.73ff./(一) 120 頁以下, 126 頁以下）。この科学は経験に基づく。

経験科学において重要なのは因果関係である。「事実の実質にかんするすべての推論は〈原因〉と〈結果〉の関係に基づくと思われる」（EHU.IV.22/p.26/23 頁）。因果性は「推論 reasoning」（あるいは「推理 inference」）と密接に関連している。人間は結果から原因を推定し、逆に原因から結果を予測する。この推論は経験に根ざしている。「いかなる事例においてもこのような関係[原因と結果の関係]の知はアプリアリな推論 reasoning によっては到達できないのであり、なにか特定の対象がつねに結合されているのをわれわれが見出すときの経験からまったく生じる」（IV.23/p.27/24 頁）。

ヒュームによれば、ある出来事に他の出来事が続いて生じるのを繰り返し経験することをつうじて、出来事のあいだの「恒常的な連結 constant conjunction」、「必然的な結合 connexion」についての観念が形成され、これが原因と因果の関係であると想定されるようになる。人間の心が因果性を想定するばあいに「想像 (力) imagination」が重要な役割をはたす。ただし、想像はそれだけでは虚構や幻想にとどまることがある (V.39/p.47/43 頁)。それは習慣をつうじて「確信 belief」に転化する (V.44/p.54/48 頁以下)。すなわち、ある出来事に続いて別の出来事が必ず生じるにちがいないと信じられるようになる。

このように、因果性の観念は、人間の心が「習慣 custom」(あるいは「習性 habits」)によって想定したものである。「相似する実例が反復されたあとに心は習性によって、一方の出来事が出現したばあいに、それに通常随伴するものを期待し、それが実在するかのように信じるよう導かれる」。「したがって、……習慣によって想像が一方の対象から、それに通常随伴するものへと移行することが、われわれが……必然的結合の観念を形成するさいの根源となる感情あるいは印象である」(VII.59/p.75/67 頁)。心は習慣によって「決定」されて、因果性を想定せざるをえないのであるが、この因果性の観念が客観的実在に帰せられる。因果性の観念が生じるばあいに、「相似する対象は恒常的に連結され、心は一方を他方の出現から推理する infer よう、習慣によって決定される」(VIII.64/p.82/73 頁)²⁾。

(3) 自然の斉一性と決定論

ヒュームによれば、因果性の観念は自然における出来事の「恒常的連結」、あるいは「斉一性 (一様性) uniformity」あるいは「規則性 regularity」の観察から生じる。ヒュームは自然における「斉一性」について定義を与えていないが、それは、自然過程を持続的なものとさせる普遍的、基本的秩序であるといえるであろう。しかし、彼によれば、斉一性から直線的に因果性の観念が生じるのではない。斉一性に基きながらも、さらに習慣に従った想像が作用することによって因果性の観念が成立する。斉一性や規則性が普遍的であるのに対して、因果性はより個別的であるといえる。「必然性と因果性 (因果作用) causation の観念は、まったく自然の作用のなかに観察されうる斉一性から生じる。そのばあい、相似する対象は恒常的に連結され、心は一方を他方の出現から推理する infer よう、習慣によって決定される。これらの 2 つの事情は、われわれが物質に帰属させる必然性 [因果性] の全体を形成する」(EHU.VII.64/p.82/73 頁)。

因果性の観念は自然の斉一性という客観的基礎と習慣による推論という主観的基礎をもつが、前者が後者の前提をなす。自然に斉一性がなく、自然の普遍的過程が変化すれば、自然における過去の出来事から将来の出来事を予測することは不可能になる (IV.32/p.38/34 頁)。われわれは自然の斉一性を前提にすることによって、確実に推論をおこなうことができる (VI.47/p.58/52 頁)。「われわれのすべての推理において、過去がまったく規則的、斉一的であったばあいに、われわれは過去から将来へ移るように習慣によって決定されるので、その出来事を最大の確信をもって期待する」(VI.47/p.58/52 頁)³⁾。

ヒュームはこのように因果性の客観的実在性を否定し、因果性を人々の習慣の主観的産物とみなすが、このことは、因果性が不確実で信用できないものであることを意味しない。彼は、経験科学における因果性の認識は「蓋然的」であるとみなすが、このばあいの蓋然性はあくまで、数学の厳

密な確実性との比較でいわれている。数学においては、あるものから別なものが論理必然的に演繹されるが、経験科学においてはこのことは成立しない。しかし、経験科学においては、ある原因から結果が生じる確度が低いばあいと、その確度が高いばあいとがあるとしても、いっそう確実なものへ接近することは可能である(VI.47/p.58f./52 頁以下)。因果性がまったく蓋然的なものであるならば、将来の出来事の予測はおぼつかないであろう。しかし、習慣において人々は因果性に信頼をおき、そこに確実性を見出しているのである。

ヒュームは『人間本性論』において、経験科学の認識が不確かなものではないことを示すために、それは「立証知(証明) proofs」に基づくとも述べている。狭義の「蓋然知」が不確性を伴っているのに対して、「立証知」は因果性の認識のなかで「不確実性をまったく免れている」ものとされる(THN.I.iii.9/p.124/(一) 198 頁以下)。

ヒュームが因果性を問題視するのは、その観念の認識論上の起源にかんしてであって、因果性が妥当性をもつことを彼は疑っていない。彼は、自然の過程が因果性の法則によって厳密に決定されているとみなす。「すべての運動の程度と方向は自然の法則によってきわめて正確に規定 prescribe されている」。「物質はそのすべての作用にさいに必然的な力によって動かされること、すべての自然的結果はその原因のエネルギーによってきわめて厳密に決定されるので、このような特定の事情においてはおそらく他のいかなる結果もそれから生じることができなかつたであろうことは、普遍的に承認されている」(EHU.VIII.64/p.82/72 頁以下)。

ヒュームは自然過程の内容にかんしては機械的決定論の立場をとる。このことは、彼が偶然性を否定することにも示される。彼によれば、偶然性と呼ばれるものは、原因が正確に認識されないばあいに想定されるものである。「世界のなかに〈偶然〉というものは存在しない。しかし、いかなる出来事についてもその真の原因にかんするわれわれの無知があり、これが知性に対して同一の影響をもつ」(VI.46/p.56/51 頁)。偶然的な出来事と呼ばれるものは、確実な原因がないことに由来するのではなく、原因のあいだに対立があり、そこから結果が一律には生じないことに由来する。「出来事のあいだの対立は原因におけるなんらかの偶然性から生じるのではなく、対立する諸原因の秘められた作用から生じる」(VIII.67/p.87/77 頁)。

(4) 実践的推論と因果性

ヒュームは因果性を推論(推理)との密接な連関で理解する。人間は自然の過程のなかに因果関係を想定することによって、ある出来事から将来生じるであろう出来事を予測する。自然の経過の予測は、人間が実践によって自然に働きかけるばあいに不可欠となる。因果性の観念は生活上の必要性から生じる。「もし、[因果性に基づき] 対象の現存が、それと通常連結している対象の観念を直ちに喚起しなかつたとすれば、われわれのすべての認識はわれわれの記憶や感覚の狭い範囲に限られたであろうし、われわれは手段を目的に適合させることも、善の産出のためか悪の回避のためか、われわれの生来の力を使用することもけっしてできなかつたであろう」(EHU.44/p.55/49 頁以下)。このように、推理は実践的、現実的意義をもつ。このことはとくに『人間知性研究』において強調される。因果性は「日常生活の推論」(V.34/p.411/38)、「実地の(実験的)experimental 推論」(VIII.69/p.89/79 頁)の産物であるとも述べられている⁴⁾。

因果性は想像によってまったく恣意的に案出されたものではない。それは、人間が実際生活にお

いて自然の出来事の予測のために、習慣によって必然的に想定せざるをえないものである。このかぎりでは、ヒュームにおいて因果性は「客観的必然性」ではなく、「主観的必然性」であるといえるが、後者は個人的で、恣意的なものではなく、〈社会的、相互主観的必然性〉というべきであろう。

ヒュームは習慣の意義についてつぎのようにいう。「習慣は人間生活の偉大な道案内である。経験をわれわれにとって有益なものとし、過去に現れたものと相似する一連の出来事を未来に期待させるのにはこの原理だけである」(V.36/p.43/40 頁)。習慣はたんに個人的なものではなく、社会的なものであり、しかも実践的なものである。因果性の観念は、自然の斉一性を客観的基礎とすることによって普遍的になるとともに、習慣を社会的基礎とすることによって、普遍的(相互主観的)となるといえるであろう。このようにヒュームは因果性を認識論的かつ実践論的に根拠づけようとする。

2 行為の因果性と自由

(1) 行為の斉一性と因果性

人間の行為はさまざまであり、複雑であって、そこには因果性は見出されないと思われがちである。しかし、ヒュームによれば、自然における出来事と同様に人間の行為には斉一性がある。行為の動機と結果のあいだには恒常的連結、因果関係が認められる。「われわれは、物体の作用においてと同様に、人間の動機と行動においても斉一性をこのように容易にまた普遍的に認める」(EHU.VIII.65/p.83/75 頁)。「このように、動機と意志的行動との連結は自然のいかなる部分における原因と結果との連結にも劣らず、規則的で斉一的であるばかりでなく、この規則的連結は人類のあいだで普遍的に承認されている」(VIII.EHU.69/p.88/78 頁, cf. THN.II.iii.2/p.409/(三) 197 頁)。

たしかに、人間の行為のなかに不規則で偶然的なものが見出される。しかし、人間の行為は自然における出来事よりも斉一性に乏しいわけではない。自然(たとえば気象)にも不規則性がある。しかし、自然を全体としてみれば、そこには規則性がある。人間の行為もこれと基本的に同様である。「[人間の行為における] これらのみかけの不規則性にもかかわらず、内的原理や動機は斉一的に作用するであろう。それは、風、雨、雲、およびその他の気象の変化が確固とした原理によって支配されると想定されるのと同様である」(EHU.VIII.68./p.88/78 頁)。

われわれは自然にかんして因果性の認識に基いて、なんらかの原因から将来の出来事を予測するが、それと同様に、人間の行為にかんしてもなんらかの原因(動機)からその結果を予測する。「観察者が通常……、われわれの行為をわれわれの動機と性格から推理できることは確実と思われる」(EHU.VIII.72note/p.94/161 頁, cf. THN.II.iii.2/p.408/(三) 196 頁)。

(2) 行為の因果性の社会的意味

すでにみたように(第2章 1-(4))、自然の因果性の認識は、自然の将来の出来事とを予測し、それを自然に対する人間の働きかけに利用するために必要である。他人の行為についても同様であり、それを予測することは社会生活において必要である。人間の行為における因果性の認識は社会生活上の推理や推論から生じる。

人間は「理性的 reasonable 存在者」であるだけでなく、「行為的 acitive 存在者」,「社交的 sociable 存在者」でもある(EHU.I.4/p.9/6 頁)。人々は相互に依存しており、行為を目的や意図に従って遂

行するためには、自分と他人の行為における因果性を認識しなければならない。行為の因果性を想定しなければ、自他のあいだで意志疎通をはかり、相互に協力することは不可能になる。「すべての社会において人間はきわめて相互に依存しているので、いかなる人間の行動もそれだけでまったく完結していることはめったになく、他人の行為とまったく無関係に遂行されることもほとんどない。ある行為が行為の意図に十分に応じたものとなるためには、他人の行為が必要である。」「人々が取引を拡大し、他人との交流を複雑化させるにつれて、彼らはつねに、このさらに多様な[他人の]意志的行動が適当な動機に基づいて自分の行動と協調することを期待し、このような行動を自分の生活設計のなかに含めるようになる。」「他人の行動にかんするこのような実地の(実験的)な推理や推論は人間生活のなかにひじょうに多く入り込んでいるので、いかなる人間も目を覚ましているあいだはこれを一瞬たりとも使用しないわけにはいかない」(VIII.69/p.89/79頁)。「必然性の説を、動機から有意的行動への、また性格から行為へのこのような推理を、容認しないならば……、科学にもいかなる種類の行為にも従事することはほとんどできないと思われる」(VIII.70/p.90/80頁)。

ヒュームは行為における因果性の認識をこのように社会生活上の予測にとって必要であるとみなすが、さらに、のちにみるように(第2章 4-(1)), 行為の原因と因果関係がつきとめられなければ、この行為を評価する(とくに責任を問い、処罰する)ことはできないともみなす。行為における因果性を否定する説は、すべての行為を自然現象と同様に責任のないものとみなすことになるとも批判する。諸行為が、「それらを遂行する人物の性格や性向におけるなんらかの原因から生じないばあいには、当人がこの行為にゆえに刑罰や復讐の対象となることは不可能である」(VIII.76/p.98/87頁)。

(3) 行為の動機と性格

行為の原因は行為者の外部の原因と内部の原因を含むが、ヒュームはとくに内的原因を重視する。彼はしばしば行為の「事情 circumstances」あるいは、「状況 situation」に言及しているが(VIII.68/p.88/78頁, VIII.72/p.94/83頁/, VIII.73/p.95/84頁), これはおもに内的なものである。内的原因は自然的、生理的原因と心理的、精神的原因を含むが、重要なのは後者の原因であり、これが「動機 motive」をなす。

動機にも個別的、一時的なものがありうるが、ヒュームが重視するのは、行為の「恒常的な原理」である。これは「性格 character」と呼ばれる。「行為はその本性上、一時的ではない temporary and perishing」のに対して、性格は「内部における持続的で恒常的な durable and constant もの」(VIII.76/p.98/87頁)である。「性格」は経験的に観察されるものであるが、個人の意識作用と行為の根底にある基本的傾向である。性格は「傾向性 inclination」, 「性向 disposition」, 「気質 temper」ともいいえかえられる。なお、性格と性向、気質とのあいだにはニュアンスの差異がある。性格が全体的、普遍的であるのと比較すると、性向、気質は部分的、個別的であるといえる(EHU.VIII.76/p.98/87頁, THN.II.iii.2/p.412/(三) 200頁, II.iii.3/p.418/(三) 209頁)。

他人の行為の結果を予測するためには、恒常的な原理としての当人の性格を知らなければならない。行為の内的原因が変化しやすければ、それを観察によって知ることは困難になる。ところで、ヒュームはこのような理解を行為の評価(賞罰)の論拠にもしている。賞罰の対象になるのは、性格に由来する行為のみである。諸行為が、「それらを遂行する当人の性格や性向におけるなんらかの

原因から出発しないばあいには、たとえそれらが善であつたにせよ彼の名誉を高めることにはならず、たとえそれらが悪であつても悪評を強めることにはならない。」(EHU.VIII.76.p98/87,cf.THN.II.iii.2/p.411/(三) 199 頁)。

(4) 動機、情念と意志

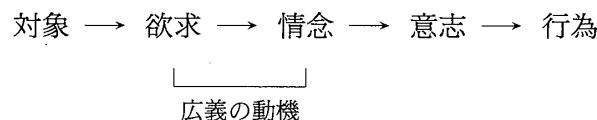
意志は動機や性格とどのように関係するであろうか。ヒュームは意志と性格の関係については直接には論じていないが、意志と情念の関係についてはかなり立入って考察している。『人間本性論』の第2部、第2章[邦訳では、第2編第2部]の表題は「意志と直接的情念」とされ、第3節が「意志の影響原因」になっている。『人間知性の研究』のなかにこれが要約されるさいに、第3節の部分は省略された。

ヒュームは情念と意志の関係についてつぎのようにいう。「快苦の直接的結果のすべてのなかで〈意志〉ほど顕著なものはない。ただし、本来的にいえば、意志は情念には含まれない」(THN.II.iii.1/p.399/(三)183 頁)。意志はそれ自身では情念ではないが、情念から生じる。意志に対して情念は「根源的影響」を及ぼす (II.iii.3/p.415/(三) 204 頁以下)。

情念はつぎのように定義される。「まずわれわれが情念ということて理解するのはつぎのようなばあいの、強烈で感知される心の動き(情動) emotion である。すなわち……欲求を刺激するために適したなんらかの対象がわれわれの能力の根源的な機構(形成物) formation [性格]をつうじて現れるばあいである」(II.iii.8/p.437/(三) 234 頁)。「〈欲求 desire〉は、単純に考えられた善から生じ、〈嫌忌 aversion〉は害悪から生じる。なんらかの心的作用あるいは身体的作用によって善をえることができるばあい、あるいは害悪をなくすることができるばあいに、〈意志〉が発動する」(II.iii.9/p.439/(三) 236 頁以下)。

情念は行為の根本的動機であるが、情念を生じさせる原因はつぎのように説明される。情念は快苦から出発点する。快に向かう情念は欲求であり、苦痛を回避する情念は嫌忌である。情念は、欲求(あるいは嫌忌)を刺激する対象が現れるばあいに生じる。欲求(あるいは嫌忌)は対象(善あるいは害悪)を外的原因とする。したがって、情念は間接的な仕方欲求の対象によって決定されることになる。意志は、欲求を充足するために身体的、心的作用を発動させるが、情念の根源的影響を受ける。情念のこのような説明はホブズにおけるように自然学的、生理学的ではなく、経験心理学的である。

ヒュームの説明を図式化すると、つぎようになる。



ところで、情念には「温和な calm」ものと「強烈な violent」ものがある。いずれかの情念が優位になって意志を決定する。望ましいのは、温和な情念によって意志が決定されることである。「一般的に確認できることであるが、これらのいずれの原理[温和な情念と強烈な情念]も意志に作用することができる。」「心の強さと呼ばれるものは、強烈な情念に対して温和な情念がうちかつことを

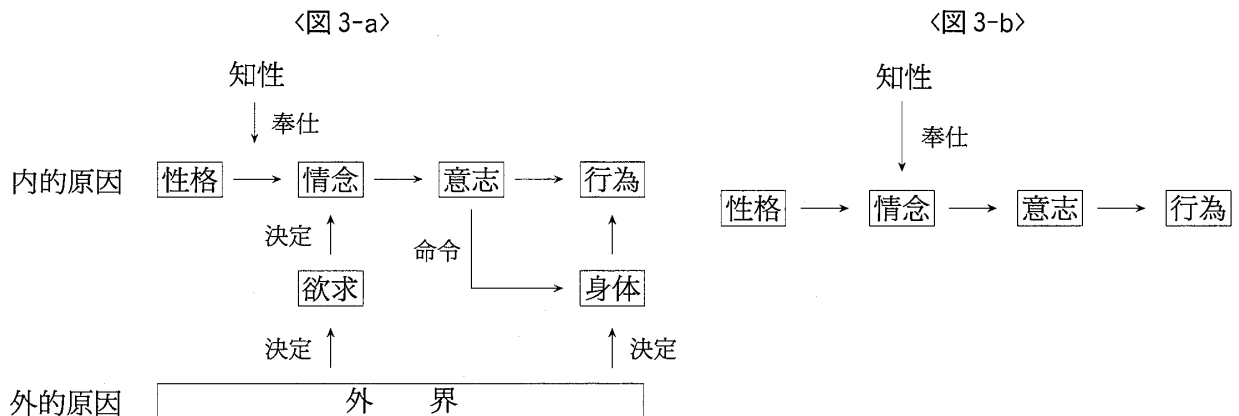
意味する」(II.iii.3/p.418/(三) 209 頁)。

ヒュームによれば、知性の役割は、情念が行為において正しい仮定に立ち、目的の実現にとって十分な手段を考慮するように奉仕することにある。この意味で、「知性は情念の奴隷であり、そうであるべきである」(II.iii.3/p.415/(三) 205 頁)といわれる。温和な情念は知性の奉仕を受けて、正しい仮定と十分な手段への配慮を含むので、知性そのものと混同されがちである。行為において問題なのは、温和な情念が強烈な情念にうちかつことであって、知性が情念一般を抑制、規制することではない。このようにみれば、情念と知性のあいだには対立はないことになる。

望ましいのは、知性によって媒介された温和な情念が意志を決定することであるといえる。意志作用が発動されるのは、善を求め、害悪を避けることが可能であると考えられるばあいであり、決意は行為の条件や手段についての判断に基く。ホッブズは意志を、熟慮(知性)をへた最後の「欲求 appetite」とみなした(第1章 1-(1))。欲求を情念と読み替えれば、ホッブズの見解はヒュームの見解に近くなる。ただし、ヒュームは意志を情念の形態とはみなさない。

ところで、情念は個別的で変化しやすいが、その背後には持続的な性格がある。「諸原理[温和な情念と強烈な情念]が対立するばあいには、人物の一般的な性格あるいは現在の性向に従って、いずれかの原理がうちかつ」(II.iii.3/p.418/(三) 209 頁)。「情念……の原因も結果もかなり変化しやすいが、それぞれの個人の持続的な気質や性向に大いに依存する」(II.iii.8/p.437/(三) 234 頁)。欲求の対象が情念に影響するばあいにも(ibid.)、情念が意志を決定するばあいにも、性格が介在する。ただし、性格がいかに形成されるかについてはヒュームは、習慣と教育が人間を「ある固定し、確定した性格」へ形成していくと、簡単に言及しているにすぎない(EHU.VIII.66/p.86/76 頁)。

ヒュームの説明を図式化すると〈図 3-a〉のようになり、これを簡略化すれば、〈図 3-b〉のようになる。



3 柔らかい決定説と意志の自由

(1) 行為の自由と意志の自由

ヒュームは自由についてつぎのように説明する。「自由ということの意味できるのは、〈意志の決定 determination [被決定]⁵⁾に従って行為し、あるいは行為しない力〉のみであり、われわれが静止したままでいることを選択する choose ならば、そうでき、また動くことを選択するならば、そうできるということである」(EHU.VIII.73/p.95/84 頁)。ヒュームはこのような自由を「仮説的な自由」

と呼び、自由を必ずしも自ら積極的に定義しているのではないが、この意味での自由は「すべての人間に属すと普遍的に承認されている」として、彼もこれを受け入れている (ibid.)。ホッブズおよびロックのばあいと同様に(第1章 1-(4), 2-(1)), ヒュームにおいても、自由の基本は、意志に従って行為を自発的に遂行すること(行為の実行の自由)にある。

ヒュームは「自由意志」を批判する(THN.II.iii.1/p.407/193頁)。彼によれば、意志の作用は先行の原因(動機、性格)によって決定されている。「たとえわれわれが自分の内部に[意志の]自由を感じると思い込むとしても、観察者が通常われわれの行動をわれわれの動機や性格から推理できるということは確実と思われる。また、たとえ、観察者がこのように推理できないとしても、彼は、われわれの状況や気質についてのすべての事情に、われわれのあらゆる心的傾向や性向の内奥の源泉に完全に精通するならば、このように推理できるであろうと彼は一般的に結論する」(THU.VIII.72.note/p.94/161頁, cf. THN.II.iii.2/p.406/194頁)。このような主張からは、ヒュームが意志の自由を否定し、行為の自由のみを認めているような印象が生じる。

しかし、ヒュームは意志の自発性を限定された意味で認めている。意志に従った行為、すなわち有意的行為は意志の「選択 choice」と「決意 resolution」(EHU.68/p.88/78頁, cf. THN.II.iii.3/p.418/(三) 209頁)に基づく。このような行為は「自発的」である。自発的とは、他のものによって拘束、強制されずに、自分の意志に従っておこなわれることである。有意的行為が自発的なものであること、自発性は自由の不可欠の要素であることはホッブズもロックも認めていた。ヒュームはさらに進んで、自発性を自由ともみなす。彼はつぎのようにいう。「自発性の自由」は「この言葉[自由]の最も普通の意味」であり、「われわれが保存しようとするのはこの種の自由のみである」(II.iii.2/p.407f./(三) 194頁)。

問題は、自発性の自由が意志そのものに属すかどうかである。彼は『人間本性論』において意志をつぎのように定義する。「考慮されることを私が望むのはつぎのことである。すなわち、意志ということで私が意味するのは、われわれの身体の新しい運動、あるいはわれわれの心の新しい知覚を知りつつ、生じさせるばあいに、われわれが感じ、意識する内的印象にほかならない」(II.ii.2/p.399/(三)183頁)。ここでは意志が経験的、心理的に理解されているが、作用を開始するという意志の自発性がそれなりに認められている。「なんらかの心的作用あるいは身体的作用によって善をえることができるばあい……、〈意志〉が発動する」(II.iii.9/p.439/(三) 237頁)ともいわれる。『人間知性研究』においては、「意志の命令」によって心身の作用は開始されるといわれる(EHU.VI.51/p.64/58頁)。ただし、意志が心身の作用を開始させることは、意志の作用に続いて心身の作用が起きるといふ経験から知られるにすぎない。「われわれは、身体が心の意志作用のあとに続いて、運動することを観察する」(VII.58/p.73/66頁)。このことは、意志が、心身の作用を開始させる特別の「力」をもつことを意味しない(VII.53/p.67/61頁)。ヒュームも意志の実体化を斥ける。

ヒュームが批判する意志の自由は、絶対的自発性をもつとみなされるような意志である。彼は、意志が比較的、相対的意味での自発性の自由をもつことを否定していない。このように、彼は、ホッブズと初期のロックのばあいよりは、意志の自発性を重視しているといえる。

(2) 意志の自由の誤った理解

自由意志説は意志を実体化し、その自発性の自由を絶対的な意味で理解して、「行為は意志に属す

るが、行為それ自体はなにものにも依存しない」とみなす(THN.II.iii.2/p.406/(三)195 頁, cf.EHU.VIII.72note/p.94/161 頁)。意志の自由についてこのような誤った誤解が生じる背景をヒュームはつぎのように説明する。

第 1 に、必然性は行為を強制、拘束するかのように思い込まれるため、行為が目的に従って実現されると、それは必然性(じつは強制)に左右されなかったという見方が生じる。「われわれがなんらかの行為を実現してしまうと、われわれが特殊な目的や道具[手段]によって影響されていることをわれわれは認めながらも、われわれが必然性によって支配されていると思い込むことは困難になる」(THN.II.iii.2/p.407/(三)194 頁)。自由についてのこのような観念は、必然性を強制と混同することから生まれる(つぎの(3)を参照)。

第 2 に、ある出来事から別の出来事を推理(推論)することは習慣によって決定されており、このような被決定という必然性(社会的、相互主観的必然性)が対象に帰属させられて、因果性となるのであるが、人びとはこのような推理のさいに、いかなる必然性によっても決定されておらず、自由であると思い込む。「物質的作用であろうと、心的作用であろうと、あらゆる作用の必然性は本来は作用者の性質にでなく、作用を考察する思考的あるいは知的存在者にある。すなわち、なんらかの先行の対象から作用の現存を推理するよう彼の思考が決定されることにある。これに対して、自由なるものは……、このような決定[被決定]の欠如にほかならず、一方の観念から他方の観念へ心が移ったり、移らなかったりするさいに感じとる、ある種の無拘束 loosenes にほかならない」

(THN.II.iii.2/p.406/(三)194 頁以下, cf.EHU.VIII.72note/p.94/161 頁)。ここでいわれている自由(無拘束)は実践上の自由ではなく、推理のさいの認識上の自由である。ただし、後述のように(第 3 章 4-(3)), ヒュームは別の箇所では、因果性の観念の成立と意志との関係について、必然性(因果性)は対象に属すのではなく、習慣によって決定された意志に属すとも述べ、意志と因果性(必然性)との結合を主張している(THN.II.iii.2/p.409/(三)197 頁, EHU.VIII.71/p.92/82 頁, VIII.75/p.97/86 頁)。

第 3 に、意志と必然性との実践的關係についてはつぎのようにいわれる。意志作用は必然性に従っているにもかかわらず、それが必然性から自由であることを示そうとする欲望のために、意志はいかなる方向にも向かうことができるとわれわれは思い込む。「われわれはたいていのばあいには、われわれの行為はわれわれの意志に従うとを感じるが、意志それ自体はなにものにも従わないとを感じるように想う。というのは、それ[意志の自由]が否定され、[意志が自由であるかどうかを]試すよう駆り立てるばあいには、意志は容易にすべての方向に動き、じっさいにはおかれていない側にさえ、それ自身の像を生み出すからである。像あるいはかすかな運動が完成して、事柄そのものになりえたかのようにわれわれは思い込む。」「しかし、このような努力はすべてむなしい……。というのは、われわれの自由を示そうとする幻影的な欲求がわれわれの作用の動機であるからである。われわれはけっして自然[必然性]の絆から自由になることはできない」(II.iii.2/p.408/195 頁, cf.THN.VIII.72note/p.94/(三)161 頁)。

(3) 必然性と強制

すでにみたように、ヒュームは意志の自発性という自由を限定された相対的意味で認める。彼が批判する意志の自由は、必然性と対立させられるような意志の自由である。意志の自発性が必然性

と対立すると主張されるばあいには、必然性が「強制（束縛）constraint」と混同されている。

ヒュームによれば、自発性の反対は必然性ではなく、強制である。意志作用や行為は先行の原因によって決定されても、強制されなければ、自発的であり、自由である。必然性に対立するのは、偶然あるいは無原因である。必然性に対立するとみなされるような自由は偶然にすぎない。「私の定義によれば、必然性は因果性（原因作用）causationの本質的部分であり、したがって、必然性を除去すれば、また諸原因を除去すれば、自由は偶然とまさに同一のものとなる」（THN.II.iii/p.407/（三）193頁）。「自由が強制と対立するのではなく、必然性に対立するばあいには、それは偶然と同じものである」（EHU.VIII.74/p.96/85頁）。

意志の自由と必然性の関係をめぐる論争においてはしばしば、意志の自由を擁護する立場から、意志が任意にどの方向をも差別なく選択できるという説（「無差別均衡 *indifferentia aequilibrii*」説）が主張された。このような無差別的な選択は自発性とは異なるにもかかわらず、両者は混同されてきた。「学院において自発性の自由と呼ばれるものと無差別 *indifference* の自由とを区別できる者はほとんどいない」（THN.II.iii.2/p.407/（三）194頁）。

ライプニッツも無差別均衡を批判していた。彼によれば、意志は他の原因によって或る方向に「傾かされ」、このかぎりで決定されるが、意志はこのような原因の誘引に能動的に反応してこの方向を自発的に選択するのであり、このかぎりで自由である（第1章 4(2)）。ヒュームは無差別の自由について立入った吟味をおこなっていない。彼はつぎのようにいうにすぎない。「ところで、人間の過去のあるいは他人の行為を反省するばあいには、われわれはこのような放縦や無差別をめったに感じないにもかかわらず、自分が行為そのものを実行するばあいには、そのようななにかを感じるといことがしばしば生じ、そのように観察される」（THN.II.iii.2/p.406/（三）194頁，cf.EHU.VIII.72note/p.94/161頁）。この引用箇所をつぎのようにパラフレーズすることができるであろう。人間はすでにおこなわれた行為については、いずれの方向をめざすことも可能であり、無差別であったとはみなさないが、これからおこなう行為は無差別であるとか思いがちである。

(4) 自由と必然性の両立

ヒュームは、〈柔かい決定論〉の立場をとり、自由と必然性とは両立するとみなす。それによれば、自由は強制と対立するが、必然性とは対立しない。人間が行為を決意するばあいには、他のなにかの原因によって決定されても、決意と行為が外部から強制されなければ、自由である。ホッブズも、外部の障碍がなく、意志に従って行為が実現されることに自由があるかぎりでは、自由と必然性とは対立しないとみなす。しかし、意志の自発性の自由を認めようとししない点では、ヒュームよりは〈硬い〉決定論の立場に立つ。

ヒュームによれば、自由と必然性の関係をめぐるこれまでの論争においては、自由と必然性のそれぞれの用語が不正確に理解されていたため、不毛な対立が生じた。しかし、用語の使用をめぐる対立を度外視すれば、事柄自体の理解については対立はなかった。「私が明るみに出したいと希望することは、必然性と自由という用語に与えられるふさわしい意味に従えば、必然説においても自由説においても、万人が一致してきたということ、すべての論争はたんに言葉にうへのものの尽きるということである」（EHU.VIII.63/p.81/72頁，cf.VIII.74.p95/84頁）。

これまでみてきたヒュームの見解を整理すれば、自由と必然性の関係はつぎのようであるといえ

るであろう。一方で、因果性についていえば、自然の因果性は、人間の心や意志の作用から独立したもの、それと対立したものではない。それは、人間が将来を予測するために習慣によって想定したものであり、この意味でそれらは人間の意志に依存している。「心は一方の対象の出現から他方の対象を推論するよう主観によって決定される」(VIII.64/p.82/73頁)。「いかなる種類の原因についてもわれわれが知ることは対象の恒常的接続および、その結果生じる一方の対象から他方の対象への心の推論以上のものではない。」「この推論は必然性を意志の決定〔被決定〕に帰属させる点で、多くの哲学者の体系と矛盾するであろうが、彼らが異論を唱えるのは言葉のうえだけであることが判明するであろう」(VIII.71/p.92/82頁)。「必然性は……人間の意志に属すと日常生活において一般的に承認されてきた」(VIII.75/p.97/86頁, cf. THN.II.iii.2/p.409/(三)197頁)。因果性はもともと、自由の実現をめざす人間の意志に基づくというのであるが、自由と必然性の結合についてのこのような理解はヒュームにまったく独自のものである。

他方で、自由についても、必然性(因果性)の認識がなければ、自然や社会において将来生じることを予測することはできず、有意的行為を成功させ、自由を実現することはできない。必然性の認識は自由の実現にとっての不可欠な条件である。しかし、必然性は強制と同一視されるために、それが有意的、自発的行為と対立すると思われこまれる。

4 行為の因果性の規範的特性

(1) 行為の因果性と評価

行為の因果性の想定が必要なのは、社会生活において他人の行為を予測するという認識上、技術上の理由によってだけではない。行為の動機を知ることは、行為に賞罰(賞賛や非難)を与え、行為の責任を問うためにも不可欠である。「人間の行為の必然性」は「宗教あるいは道徳にとってきわめて本質的であって、この必然性がなければ、宗教あるいは道徳も絶対的にくつがえってしまう」(THN.II.iii.2/p.410/(三)198頁)。もし、自由意志説が主張するように、意志の自由が必然性と対立し、意志作用が原因をもたないとすれば、いかなる行為も非難や処罰を免れるであろう。「必然性、したがって原因を否定する原理によれば……、人間はきわめて恐ろしい罪を犯したあとでさえ、誕生の最初の瞬間と同様に純粹で無垢であることになる」(EHU.VIII.76.p98./87, cf. THN.II.iii.2/p.411/(三)199頁)。「必然性の理論に基く以外には〔自由あるいは偶然の説によれば——THN〕、それら行為はけっして〔内的原理の〕証示にならないであろうし、したがってけっして罪あるものとはならないであろう」(EHU.VIII.76/p.99/88頁, cf. THN.II.iii.2/p.412/(三)200頁以下)。

ヒュームは、行為の動機と結果のあいだに必然的結合がなければ、行為に賞罰を与え、その責任を問うことはできなくなるとして、決定説の立場から自由意志説を批判する。これに対して、自由意志説は、意志の自由がなければ、人間の行為は自然における出来事と同様に、賞罰の対象とはならず、責任を問われることもないと主張して、決定説を批判する。このようにみると、ヒュームの決定説と自由意志説とは、行為の責任の根拠をめぐる正反対の立場をとるように思われる。しかし、じつはヒュームは緩やかな決定説の立場から、行為は意志の自発性に基づくばあいに、責任を問われるということを認めるのである。

(2) 意志の自由と行為の責任

ヒュームによれば、行為の賞罰のさいには、行為がどのような性格（内的な持続的原因）に由来するかが問題になる。たんなる外的原因や内部の生理的原因から生じる行為は賞罰の対象にはならない。この点で、人間の行為の扱いと、自然の出来事、他の動物の扱いとは根本的に異なる。「憎悪と復讐の唯一の本来の対象は人、あるいは思考と意志を備えた被造物である。……諸行為はまさにそれらの本性からみて一時的であり、はなかい。そして、これらの行為が、それらを遂行する当人の性格や性向におけるなんらかの原因から出発しないばあいには、たとえそれらが善であったにせよ彼の名誉を高めることにはならず、たとえそれらが悪であっても悪評を強めることにはならない。それらの行動自体は非難に値するかもしれない。それらは徳および宗教のあらゆる規則に反しているかもしれない。しかし、その人物はそれらに対して責任をもつ answerable[THN では accountable] ことはない」(EHU.VIII.76/p.98/87 頁, cf. THN.II.iii/p.411/(三) 199 頁)。ここでは、行為が「思考」と「意志」に基くことが、それが賞罰の対象となる基本条件とみなされているが、具体的にいえば、行為が状況や手段についての判断、および意志の自発性がその基本条件に基くとみなされているであろう。

行為の賞罰のさいには、行為が強制されずに、自発的におこなわれたかどうかのポイントになることについては、つぎのようにいわれる。「自由は……道德にとってもまた本質的である。自由が欠けていれば、人間のいかなる行動も道德的性質を受け入れないし、是認や嫌悪の対象とはなりえない。というのは、諸行為は内的な性格、情念、情動 affection の表示であるかぎりでのみ、われわれの道德的感情の対象であるので、諸行動がこれらの原理から生ぜず、ことごとく外部の強制(暴力)に由来するばあいには、賞賛と非難のいずれも生じさせることはできないからである」(EHU.VIII.77/p.99/88 頁)。ここでは、自由は自発性の自由であること、性格から出発する行為が自発的であることが前提にされているように思われる。

つぎに、行為における意識性、意図性についてはつぎのようにいわれる。意図せずに生じた結果、偶然的で突発的におこなわれ行為の結果は賞罰の対象にならないか、なるとしても、その程度は低い。「人々が知らずに、またたまたおこなう行動は、結果がどうであれ、非難されない。」「人々は性急にまた故意にではなく遂行する行為については、熟慮から生じた行為についてよりも非難されることが少ない」(EHU.VIII.76/p.98/87 頁, cf. THN.II.iii.2/p.412/(三) 200 頁)。

後悔や悔悟も行為者の意識性、自発性を前提にする。すでにおこなわれた悪行の結果も、それが後悔され、悔い改められるならば、なかったものとみなされるが、その理由は、このばあいには行為の原理が変化することにある。「さらに、後悔は、生活や行状の改革をとまなうならば、すべての罪を拭い去る。このことはいかに説明されるのか。つぎのように主張されることによってのほかならない。すなわち、これらの行為が心における罪ある原理の証示 proof であることによってのみ、それらは当人を犯罪者にする。これらの原理が変化すれば、諸行為は、ほかならぬこれらの証示であることをやめ、同様に罪あることもやめる」(EHU.VIII.76/p.98/87 頁以下, cf. THN.II.iii.2/p.412/(三) 200 頁)。

賞罰は、行為者の意識性、自発性を前提としている。賞罰が意志決定のさいに事前に考慮されることによって、善行が促進され、悪行が予防される。「すべての掟(法律) law は賞罰に基づいており、これらの動機が心に規則的で斉一的な影響を与え、善行を生み出し、悪行を防止することが根

本的原理として想定されている」(EHU.VIII.76/p.97f./86 頁)。

ところで、賞罰、後悔においてとくに重要なのは、意識性や意図性一般ではなく、意識の規範性であろう。賞罰は行為者の規範意識(善悪の観念)に作用することによって意味をもつのであり、後悔もこのような規範意識によって生じるといわなければならない。行為が「罪ある原理の証示である」ために、処罰されるが、この原理が変化すれば、行為は「罪あることをやめる」といわれるばあい、この原理はたんに心理的なものとしての性格ではなく、規範意識(善悪の観念)をともなったものであろう。

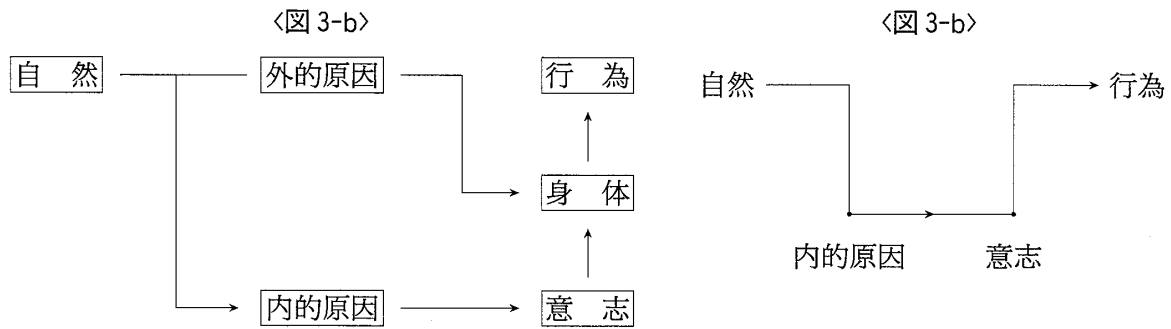
また、ヒュームによれば、悪行を処罰するさいにも、持続的原因に基く行為がより罪が重い。たとえば、軽率な行為の罪が軽いのは、軽率さが気質に由来するとしても、この気質が性格全体に影響を与えるほど確固としたものではないと述べる。「人間は、熟慮から生じた行為にたいしてよりも、性急に、予め考えずにおこなった行為にたいしての方が非難される度合いが低い。その理由はもっぱらつぎのことにある。いかなる理由によってか。性急な気質は心のなかの恒常的な原因あるいは原理ではあるが、たんに間歇的に作用するにすぎず、性格全体には感染しないからである」(EHU.VIII.76./p.98f./87 頁, cf. THN.II.iii.2/p.412/(三)200 頁)。しかし、罪の重さは原因の持続性の有無のみあるのではないであろう。行為の評価においては問題になるのはむしろ、行為の動機が行為の善悪についての規範的意識をどれだけ強く含んでいたかであろう。性格は規範的文脈のなかで評価されなければならないであろう。

(3) ヒュームの行為決定説の問題

自然における原因と結果の関係、あるいは動物の行動における原因と結果の関係とは異なって、人間の有意的行為における動機と結果の関係は事実的側面のほかに規範的側面をもつ。しかし、ヒュームは行為の因果性の規範的特性を明らかにしてはいない。彼は自然の因果性も行為の因果性も「同一の本性的のものであり、同一の原理に由来する」とみなす(EHU.VIII.70/p.90/80 頁)。

ヒュームはこの点についてつぎのような例を挙げる。死刑囚に対しては、監獄や処刑の道具における「自然的な原因」も、看守や死刑執行者における「精神的な moral」原因も、脱獄を不可能とし死刑をもたらす点では、同じように、また協同して作用する。「ここには自然的原因と有意的行為との結合の鎖がある」(ibid.)。この例においては、他人の行為における動機と結果のあいだの事実的關係が問題になっており、規範的關係は問題にならない。自然的、物的原因も精神的、心理的原因(動機)も自然的、物的なもの(脱獄を不可能とし、死刑をもたらす)として作用し、自然過程に入り込むので、両者の原因のあいだに根本的な相違はないことになる。

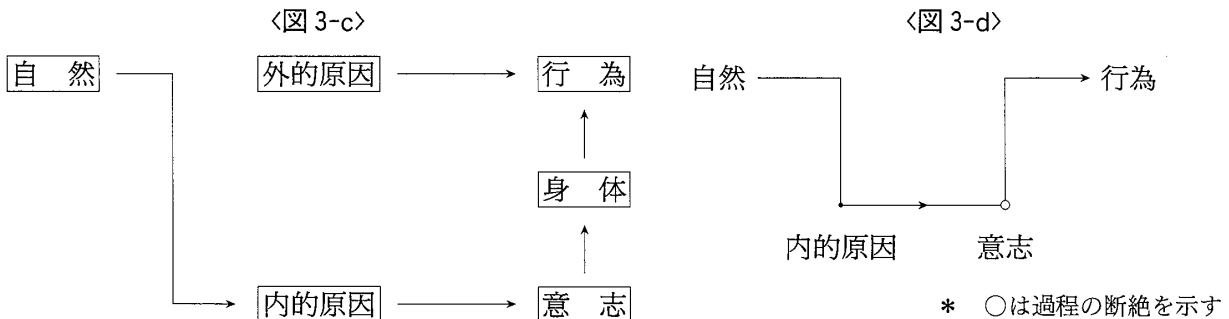
ヒュームの説明を図式化すると〈図 3-a〉のようになり、これを簡略化すれば、〈図 3-b〉のようになる。〈図 3-b〉を第 1 章の〈図 1-c〉(ホブズのばあい)と比較されたい。



行為の因果性の事實的側面と規範的側面は区別されなければならない。しかし、両者のあいだにはたしかに相互連関もある。動機と結果の事實的関係を認識することは、それらのあいだの規範的關係を理解するための前提をなす。ヒュームが重視するのは、動機を経験によって把握可能（記述可能）なものとし、それを外的な自然的原因や内的な生理的な原因に還元しているわけではない。しかし、意志の自発性、自由を行為の因果性の規範的特性との関係で考察してはおらず、この点に問題がある。

すでにみたように、ホッブズはヒュームよりも強い決定説をとりながらも、意志に基づく行為のみが賞罰の対象になり、そのばあいには、意志作用がいかなる先行の原因によって決定されたかは問題にならないとみなしていた（第2章 1-(6)）。動機をたんに先行の原因によって決定された事実としてとらえるか、規範的脈絡においてそれとは断絶して、行為を自発的に開始するものととらえるかによって、行為に対する評価（賞罰）は大きく異なる。規範的文脈では決定説は貫徹が困難になるであろう。ホッブズは、意志の役割を規範的脈絡においてとらえる方向を開きながらも、この問題を解明せずに終わった。同様な課題は、弱い決定説をとるヒュームにも残る。一般に、意志の自由を規範的脈絡で十分に理解できないことが、行為決定説の弱点である。

意志の自発性は行為において事實的因果性とは異なる規範的因果性を生み出し、後者は自然過程を中断する。意志の自発性に基づく行為の結果は事実として自然過程に編入されるが、規範的秩序におかれ、賞罰の対象となり、責任を問われる。このことを図式化すると〈図 3-c〉のようになり、これを簡略化すれば、〈図 3-d〉のようになる。



本論においては以後つぎのことを考察したい。すなわち、カントは自由の因果性（原因性）という観念を導入することによって、自発的意志が結果に対しても規範的意味を明らかにしようとし

たこと、そのさいに、ヒュームの柔軟い決定説に対する批判的意識が働いたと思われるということである。

注

- 1) ヒュームの *A Treatise of Human Nature* については L. A. Selby-Bigge 編, P. H. Nidditch 校訂の第 2 版に依拠し, Book, Part, Section をそれぞれローマ数字大文字, ローマ数字小文字, 算用数字で示し, 上記テキストの頁を p. 以下に示す。邦訳は, 大槻春彦訳『人性論』(岩波文庫, 1948-52 年, 4 分冊)の巻数を () に示し, つづいて頁を挙げる。Enquiries concerning Human Understanding は同じく L. A. Selby-Bigge 編, P. H. Nidditch 校訂の第 3 版に基き, Section 番号をローマ数字大文字, 編集者が欄外につけたパラグラフ (改行部分) 番号を算用数字で示す。邦訳は, 斎藤繁雄・一ノ瀬正樹訳『人間知性研究』(法政大学出版局, 2004 年)の頁を示す。
- 2) カントは『プロレゴメナ』でヒュームの見解をつぎのようにまとめている。理性は想像力によって欺かれて, 「主観的必然性」にすぎない因果性を「客観的必然性」であるかのように取り違える。「理性はこの [因果結合, 原因性の] 概念にかんして [想像力によって] 完全に欺かれている。……想像力 (構想力) は, 経験によって孕み, 一定の表象を連想の法則のもとにもたらし, そこから生じる主観的必然性すなわち習慣を, [理性の] 洞察から生じる客観的必然性とすりかえる」(Prol.257f., Vgl.KrV.B127)。
- 3) カントはヒュームの因果論を批判するさいに, 因果性の観念の 2 つの基礎のうちの, 習慣によって決定された心の作用のみを問題とし, 自然の斉一性についてのヒュームの見解には言及していない。
- 4) ヒュームは因果性の観念の起源を認識論的に吟味したが, 因果性の現実的意義を疑ってはいないということをカントも『プロレゴメナ』において確認している。「原因という概念が正当で有用であり, あらゆる自然認識にとって不可欠であるかどうかは問題でなかった。というのは, このことをヒュームはけっして疑わなかったからである。……まさに問題はこの概念の起源であって, この概念の使用が不可欠かどうかではなかった」(IV.258f.)。
- 5) 「意志の決定 determination of will」は能動的意味と受動的意味とに解釈できる。ヒュームが強調するのは, 意志や心が習慣によって「決定される」(受動) こと, 因果性が習慣によって決定されることである。しかし, 本文の後続箇所では示されるように, 意志が行為を決定し, 「決意し resolve」, また因果性を決定するような説明もヒュームはおこなっている。

〈前論文の記述訂正〉

- 95 頁 19 行 (第 1 章の注 1) ヒューム → ロック
 96 頁 14 行 (第 1 章の注 12) 家庭的 → 仮定的